

## 十六 大逆事件

### 1 家宅搜索・引致

明治四十三年七月、私は刑期が満ちて、千葉監獄を出しました。通信でかすかにそれと察してはいたのですが、大逆事件を聞いて一寸驚きました。迎えにきてくれた渡辺政太郎君その他の人々は私が意外に元気であったのを喜んでくれました。入獄前に亡母を葬るべく寒い夜中に貨車内の遺骸を守って埼玉県本庄駅まで行きましたが、それが凍るような寒さであったので、私はひどい風邪にかかりました。入獄の際も咳がはげしく、毛細気管支炎をわずらっていたので、友人達は非常に気づかって迎えてくれたのであります。その病気はまだ全治したわけではありませんが、兎も角も元気で出獄し得たのは吾も人も嬉しかったです。

出獄する間もなく家宅搜索がやってきました。幸徳等の大逆事件に関連した取り調べでありました。手紙その他一と山の書類を車に載せて持って行き、同時に私も警視庁に引っぱられました。その搜索の際でした、判事か検事か知りませんが若い男が、私の大切にしまっておいた澄子さんの写真と手紙とを探し出し、私の顔と、その写真と手紙とを幾度も見かえすのです。神聖なものを汚がされたように感じたので、私はいささか怒気を帯びましたが、若者はそれに気付いたと見えて、ていねいに元どおりにたたんで包みました。

警視庁に於ける警戒はかつて経験したことのない嚴重さでありました。その夜は留置場ではなくて二階の大広間に、刑事二人が私の寢床の前後に付きそうて不眠の看守を続けるのでした。押収書類は徹夜で調べたのでしょうか。翌朝は早くから訊問を受けました。訊問の中心は皇室に対する私の考えを質すにありました。長い訊問応答に於いて、私の述べた大体の意見は次のようなものであります。

学校の国際法の講義でああなたがたも論究したことであろうが、将来世界が一つになる時、それを共和制に統一するか、君主制を以てするか、ということが問題になるであろう。そうなれば日本の国体などは問題でなくなりません。ではさしあたり、皇室に対して如何なる態度をとるか、私は暴力沙汰を排斥する、それは決して効果がないからである。

こんな要領の答をすると、検事は一通の手紙を出して私に示すのであります。それは木下尚江が赤羽巖穴に送ったもので、私の留守中に赤羽が預けておいた行李の中から見出されたものであります。

た。その手紙の要旨は、

先日石川が来て、今度入獄すれば病中の自分は必ず獄死するであろう。若し死んだら遺骸を引取って、二重橋外に晒らしてくれ、と言っていた。しかし、僕はそのようなことはしないで、普通に葬ってやるつもりだ

というようなものでありました。そして検事は、

「皇室に対して激しい敵意を持っているようであるが、どうか」

と、つめ寄ってくるのでありました。私はハッと驚きました。何しろ大逆事件の際であるし、また幸徳の家にはしばしば出入していたので、事件に巻き込まれはせぬかと恐れたのです。

「何しろ天皇の名において刑の宣告が言い渡されるのだから、私が木下にそのようなことを言ったらすれば、それは自然の感情の発露でありましょう」

と私は答えました。そして更につけ加えました。

「昨日私のところで押収された『虚無の靈光』の中に、マルクス主義や無政府主義についての私の意見が書いてあるから、それを読んで頂きたい」

この小冊子は、前に書きましたように、単鴨監獄在囚中に書いたものですが、まだ製本屋の手中にある間に警視庁の手に差押えられたもので、残余の破損紙を集めて一冊に製本したものでした。その

中に次のようなことが書いてありました。

マルクスの歴史主義的革命論も、クロボトキンの理想主義的革命論も、ともに自由解放の運動としては一種の空想である。歴史過程に沿って強権を以て社会政策を行っても解放にはならない。まさに単に暴力革命によって自由平等の理想社会を打開しようとしても、それは不可能だ

こんな文句のある頁を開いて検事に示すと、彼は納得したらしく、訊問を止めて世間話にうつり、「昨夜から御苦勞様でした。何かお弁当を取るから喰べて下さい」

と、それにて放免ということになったようでした。お弁当など喰べずに早く帰ろうとも思いましたが、昼食時を少し過ぎたので出された「うなどん」を食って心も落付いて帰途につきました。前夜もその朝も「天どん」の御馳走でしたが、心が落付かないので、あまりうまくなかったが、最後の「うなどん」ですっかり元気になりました。

帰宅すると皆が非常に喜んでくれました。都下の新聞なども私の拘引を書きたてたほどだったから、友人達も少し心配になったのでしよう。当時すでに千葉監獄から帰っていた堺は、はがきをよこして、見舞に行きたいとも思うが、こんな際だからおとなしく引込んで、と書いてありました。アメリカの新聞は幸徳の事件に連坐するものとして、私の拘引を報じ、福田氏の写真まで掲げて記事にぎわせました。それは平民社時代に日本にきていたフライシユマンと言う男が書いたものであり

ましよう。当時アメリカにいた前田河広一郎君がその新聞を送ってくれたのです。

幸徳等の大逆事件が起った時に、私はこの機会に死刑廃止の運動を起したいと思ひ、徳富蘆花を訪問したことがあります。その当時新宿駅前から甲州街道を走る馬車がありました。それによって粕谷村を訪問するつもりで馬車に乗ると、途中で蘆花が人力車を列らねて新宿駅の方に行くのに出会いました。私はすぐに馬車から降りて蘆花の一行を新宿駅まで追いかけました。そして幸いに蘆花と話すことが出来ました。けれども蘆花は私の死刑廃止運動の意図を聞いて、それに協力することに同意しませんでした。趣意には賛成であるが、それについては私に別に考えがあるから行動を共にするわけには行かない、というのが蘆花の答でありました。やむをえず私はそのまま引返しました。それから私は弁護士の花井卓蔵を訪うて、死刑廃止の運動を起したいから賛成してくれるように申し込まれました。ところが花井もまた趣意は無論同感だが、幸徳の事件が勃発している際に死刑廃止運動を起すということには賛成出来ない。幸徳事件に死刑廃止という学問上の趣意と、弁護の仕事とを混同される気味あいがあるので面白くない。どうもそれをこの際一つの社会運動にするというのは不穩当でもあり効果も少かるう、というのが花井弁護士の説でありました。平生死刑廃止論を唱える花井氏の思想を知っている私は、この際こそこの人を引っぱり出してこの運動の衝に立たせたいと思つたのです。が、私の計画は失敗に終わりました。これによって私自身の勇氣もくじけ、この運動はそのまま立ち消えになってしまいました。

明治四十三年十一月、大逆事件の取調べが漸く終りに近づき、接見禁止が解除されました。秋水の母親たち子刀自は遙々四国から上京して、愛児秋水に面会することになりました。七十二歳の老母が吾が子に最後の別れを告げるべく切なる心情を懐いて来たであらうことは言うまでもありません。それはよう。然るにこうして面会をすませて、無事に帰国したたち子刀自は間もなく病死しました。それは十二月二十八日のことでありました。私はたち子刀自の死去のことを聞いたので、獄中の秋水にその見舞の手紙を書きました。それに対して秋水から次のようなはがきが来ました。

君も慈母に別れた哀みがまだ新らしいね、僕は今度の計報と共に無量の悲痛と悔恨とに責められた、併しイツ迄メソメソ泣いても居ない、幸に放心焉、○抹殺論には僕のオリヂナリチーは殆どないから、若し時間の余裕と官の許可とがあつたら、僕の人生観の断片を少しばかり書いて置きたいと考へてゐる、果して意の如くなるや否や、メチニコフとかの長寿論は米国の榮養雜誌で梗概を読んだやうな気がする、出版になつたら見せてくれ玉へ、○張継が常に親切に音問してくれだが入監後消息が堪えてゐる、彼の住処を章炳麟に聞合せて僕の境遇と御無沙汰のわびを通じて置いてくれ玉へ、是非頼む、我生活は今日迄何の達しもない、年末年始は事務の休みであつたためでもあらうか、○福田刀自は不相変壮んだらう、なつかしく思ふ、宜しく伝語、○寒くなつたね、道の為め自愛せよ。

一月四日

秋水

このはがきの中に「君も慈母に別れた哀みがまだ新らしいね」とあるが、これはこの前年（明治四十三年）私が入獄した直前に母の死去に会ったことを言うたのであります。明治四十四年一月二十日頃、東京監獄の管野すが女史から端書が届きました。

十日に書いたのが不許になりましたから、又これを書きます。

△過日は御葉書有難う存じます、アナタの御入獄を送る為めの富貴亭の晚餐が永久の御別れの記念となりましたね、もうつい一年ぢやありませんか、早いものでございますね△私此四五日腸を痛めて少し弱つて居りますが思ひの外壮健で元氣よく暮して居ります。

やがて来む終つひの日思ひ限りなき

生命を思ひほく笑みて居ぬ

と言つた様な次第でございます△数日中に宣告がございませう△娑婆の面白さうな事をどうか折ふし御知らせ下さいまし。

乞御自愛

一月十四日

管野須賀子

「富貴亭の晚餐」というのは私が二度目の入獄の際、管野と幸徳とが二人で送別の宴を開いてくれた、そのことです。富貴亭は新橋のすぐ近くにあった普茶料理店です。

## 2 執行

一月二十四日の朝、社会主義者仲間の名物男の一人であった斎藤兼次郎君が、はげ頭を真赤に光らし、眼まで充血さして、あたふたと私の家に這入って来て、

「石川さん、今やられているんですって」

「何がですか」

「市ヶ谷で朝から始めてるんだそうです」

おどおどした斎藤君の顔付と素振りでは私はすぐに感付きました。

「幸徳達ですか」

「えー！ とうとう」

斎藤君の顔は血を湛えていました。まさかと思つたのは、こちらの不覚でありました。とうとうやるか。そう思つた私はただ斎藤君と顔を見合わせてだけで、ちょっと言葉も出ませんでした。

「とにかく、界の所に行きましょう。先に行つて下さい。すぐ行きますから」

斎藤君を帰して私は自分が少し興奮し過ぎているのを落付けたと思つて食卓に向いました。胃腑

を一ばいにしたら宜しかろうと思ったからです。だが、喉はかわき閉鎖して、食べるものはつかえるばかり。一杯の飯を辛うじて嚥下して家を出ました。堺君の処に行くと、堺君もかなり興奮していました。幸徳等の遺骸を引受けたという篤志（？）の宗教家が幾組かやってきます。平常は国賊無頼漢として排撃もしたが、此際は神仏の慈悲を示したいという有難い情なのでしょう。それを一々皮肉交りで撃退する堺君の態度は殺気をさえ帯びていました。

その晩のこと、十二時頃でありました。堺、大杉両君と私と三人でどこかで相談でもしたものの、大分酒気を帯びて信濃町停車場で下車しました。その頃は実に淋しい停車場でありました。その停車場のそばに交番が寒そうに立っていました。一月末のそれも、もう夜中なのです。

停車場を出ると堺君は交番の横の暗がりです。交番にツバなど吐きかけて、と気を付けて見ると先生の足許から白い煙が揚っています。小便をやらかしているのです。小便しながら唾を吐くのは堺君の自然法則でありました。交番の若い巡査は気が付いたらしく、眼を光らしましたが、吾々に尾行していた三人の刑事が何か耳うちした結果、彼方を向いて知らぬ顔。

その交番の横から、道路が掘りかえしてでもあったか、警視庁の赤い瓦斯燈が二、三間の間隔をおいて三ツ四ツ並べてありました。それに沿うて吾々は堺君の家まで行くのでありました。何か三人話しながら歩を進めていましたが、忽ちガチャーンと烈しい音を立てて瓦斯燈の硝子が破れました。堺君のステッキが活動したのです。堺君の意志を遵奉して突っかったのです。誰も何とも言いません。宇宙的沈黙が吾々を閉じました。三人の刑事はわなわな慄えている様子でした。寒かったからで

しょうか。

二番目の瓦斯燈の処へ行きました。

「ちえー！」

という叫びが堺君の口から迸りました。と同時に二番目の瓦斯燈がガチャーンと倒れました。今度は堺君の足が活動したのです。瓦斯燈のランプの石油が流れて火がつきはしないかと心配しましたが、ひっくり返ると同時にランプは消えました。腕白の株を堺君に奪われた大杉君はつまらなそうに後について行きました。刑事は私の側に来て、

「どうか堺さんをお家まで送って下さい。」

と哀願します。何しろ一方では仲間の首をしめて命を奪っている最中です。刑事達もあまり気持がよくはなかったのでしょう。殺気立った堺君の態度を見て、この場は無事に済ますに如かずと考えたものとみえます。

幸徳等の遺骸を受取って落合の火葬場に送ったのはその翌日のことでありました。十二名が死刑、他の十二名は刑一等を減じられて、無期懲役になりました。その無期刑者のうち坂本清馬君の所持品が私に宅下げになったので、監獄に受取りに行きました。その時、いろいろの手続に没頭している間に、坂本君に対する減刑言渡書が紛失しました。驚いて諸方を探していると、松崎天民という新聞記者が風呂敷包の中からそっと引きぬいて書き写しているのです。おそろしい奴だと思いましたが、怒

りもされず、写真に撮るなら貸してあげるから用のすみ次第すぐ返しなさい、という喜んで持って行きました。

明治四十四年一月二十四日の朝から死刑を執行されたものは、

幸徳伝次郎、奥宮健之、森近運平、内山愚童、大石誠之助、松尾卯一太、古河力作、宮下太吉、成石平四郎、新村忠雄、新美卯一郎の十一名で、管野須賀子は独り翌日に執行されました。

減刑されて無期になった十二名は、

高木顕明、飛松与次郎、坂本清馬、崎久保誓一、岡本顯一郎、武田九平、三浦安太郎、岡林寅松、小松丑治、佐々木道元、峰尾節堂、成石勘三郎、等でありました。

死刑になった大部分の遺骸はわれわれが引きとって落合火葬場に運びました。市ヶ谷から新宿を経て郊外に行く途中には、雪が積もっていました。鉄道線路の東側には、その当時まだ広い大きな竹藪があり淋しいところでした。われわれが棺桶に付添って長い行列をつくって行くと警察はあわて出しました。大勢が行列を作って示威運動をやってはいかんというのです。嵬が怒って、こんなに多くの死骸を作ったのはお前達じゃないか、それを送るのが悪ければ、おれたちはここから帰るとどなって、更に同志たちに向けて「諸君、見送ってはわるいそうですから、ここから帰りましょう」。これを聞いてあわてたのは運搬の指揮に当たった警部で、俄かに態度を改めて、「イヤ、どうぞ御自由にして棺だけは運んで下さい」と折れて出ました。この時の光景は今も眼の当りに見るようです。もう一つ、われわれが遺骸を守って火葬場に着き、多くの棺を受付のところに並べたとき死刑者内

山愚童の弟がずかずかと兄の棺の側に進み、縄を切り棺の蓋を除き、死者の顔にじっと見入り、「ヨーン間違いなし！」と言いはなった、その光景が如何にも印象的だったので今も忘れることができせん。豪胆な愚童和尚のことは前にもお話しましたが、この弟もまた兄にまけない人物だと私はつくづく感じました。

#### 〔補注〕 事件の真相

大逆事件の真相は後世に至るまで余り精確に知られていません。私もその当時獄中に幽囚の身であり、出獄すると間もなく家宅捜索を受けて、警視庁に引致せられましたが、前にも言ったように無事帰宅を許されました。こんな関係である事件を詳細精確に説明することができません。今は唯だ私が同席した一座談会に於ける沖野岩三郎君の談話の中から、その一節を要約しておきます。

（昭和二十五年二月一日発行「文芸春秋」「大逆事件前後」と題する石川三四郎、沖野岩三郎、山崎今朝弥、座談会）

「……」その起りの大体はかういうことなんだ。大石誠之助というのはアメリカ・ドクトルで、非常に人望のある医者です。田舎にばかり居っちゃいかんからと言って、年に一回旅行をする。毎年変った所に行く。明治四十二年の暮に東京へ来た時に、柏木の幸徳秋水の宅へいった。大石さんを

歓迎した会で皆が寄った時に幸徳が、昔林有造の家にいた時に、「一夜にして天下を取る法はないか」という話が出たという話をした。すると、いろいろな案を出したが、一人「二重橋の外から宮城の中へ爆弾を投げる」と言った男がある、この話をジッと聴いてをった大石が「そんなことは駄目だ。俺にやらせりゃいい方法がある」「どういう方法か」「俺の甥に西村伊作という金持がある。それを紀州から呼んで、貧民に米をやるから、みんな集れという宣伝ビラを拵えて撒かせる。すると大勢集って来るぞ。そこで爆弾を拵へて俵へ入れておいて、いま米はないから、お前はこれを持って三菱へゆけ、お前はどこへゆけ、と言ったら、みんな喜んで爆弾を持ってゆくだらう」と言った。しかし大石というのは理性ある人だから、そう言った後で「いや、そんなことは線香花火みたいなことだ。やっぱり駄目だなあ」と付加えたんです。「じゃ、一つも方法がないか」「実はここで身を捨てて働く青年が五十人あったら事が出来る」そう言う結論になった。それから大石は京都へ行って柵屋へ泊った。そこへ戸組松太郎という『日の出新聞』の記者で、前に紀州にをった男が訪問して来た。「先生、何か面白い話はありますか」「いやあ、別にないが、東京の幸徳の家でこういう話が出た」と詳しく話してやった。「そうですね。それは面白い話だ」と帰っていった。それから大石は大阪へ行って定宿に泊ったら、大阪の同志が三名やって来て、「先生、東京で何か話はありませんでしたか」「いや、別にないが……」とほかに話がないもんだから、また幸徳の宅での話をした。それから紀州へ帰って、やがて四十三年の一月になった。大石達が新年宴会をやったのです。何日に宴会をやるというので、出席者を決めて回状を作って、成石平四郎という男が大石に見せた。見て行くと私（神野）の名前が書いてある。ところが私は酒を飲まん。大石さんは同志社にいてアメリカへいった人だから、さういう点によく気がつく。「成石君、今晚の会は酒を飲むん

だらう」「勿論です。新年だから大いに飲みます」「それじゃ神野は飲まないんだから可哀想だ。除けとき給え」それが今日私のこうして生きていて喋れる所以だ。私の名前を消した成石が「それじゃ神野の代りに、うちの兄貴を呼んでくれんか」と言った。「そんなら呼ぼう」というので、成石は成石勘三郎と兄貴の名前を書いた。そうして、一晩飲んでいろいろな話をした。成石の兄貴というのは社会主義の社の字も知らない、何にも知らない一田舎漢に過ぎない。それが酔っ払って「や、とても面白い話だ、やるべし、やるべし、大いにやるべし」と言った。

さて六月一日になって幸徳さんが検挙された事件が起ったわけだ。京都の戸組松太郎が検事局で調べられた。「私は何も知りません」「いや、幸徳のことで何か知つとる筈だ」ここで戸組が気を利かした。「ああ、あれですか。あれは何でもないことだ、慶安太平記のようなもんですよ」「えッ、慶安太平記とは何だ」「くだらんことです。宮城のそこから地雷火を投げるとかいう話があるでしょう。そんなような馬鹿なことを話したんですよ」「それはどういうことか」だんだん訊き詰められた時に、詳しく話せば大石は助かると思ったものだから、戸組はみんな話しちゃった。ところが、検事局はこれは大問題だと思った。それまで知らなかった事実だから、それッというので遽かに緊張して、関西方面、大石君の歩いたあとを廻って徹底的に調べた。大石は東京で幸徳と爆弾の話をして、五十人あれば出来ると言った。その五十人の同志募集に歩いた。まず京都で戸組を味方に入れて、次に大阪で三人ばかり入れた。それから紀州に帰って猛者を七、八人集めた——。こういう風に検事局は考えた。大逆事件を作りあげたというのは、そこらのことだ。

それに対してこういう事実がある。宮下太吉というのは大林区署に勤める官吏です。木曾川の大林区署に居った時に、森近運平君が大阪で新聞を出して居った。宮下は森近君を非常に尊敬してつ

いに弟子になって、いろいろ指導を受けた、その頃明治天皇が京都においでになることを新聞で見て、天皇を崇拝しちゃいかん、という意味のことを書いた宣伝ビラを拵えて、駅で大勢がお迎えしている所へ行って配った。その反響如何と見ていると、みんなちよつと見ただけでパツと抛っちゃう。一人としてそのビラを懐中へ入れる者はない。そこで宮下は、日本人は駄目だ、一つ投げつけてやらんことには目が覚めん、実行あるのみだ、と考えた。ここに実行という意志が出たわけです。そのうち宮下君は信州へ転任した。

ここにもう一つ、こういう因果がある。新村忠雄君が大石さんの所へ行つて、薬局へ入つて塩剝えんぺを一封度、大石医院というレットルの貼つてあるのを黙つて取つて鞆へ入れてきた。これは爆弾を拵えるためなんです。幸徳さんの所で一夜に天下を取る法という話をした時に、一体爆弾はどうして拵えるのか、ということになった。それはエンサイクロペディアを見れば判るといふので、大英百科全書を出して来て調べたらば、ちゃんと拵え方が書いてある。そうして大石さんは帰つたが、あとへ訪ねてきたのが奥宮という、名古屋事件で無期徒刑になつてをった男です。幸徳さんが「ゆべこんな話があつた」といつたら奥宮が「それは駄目だ。本で見つて爆弾は造れやしない。爆弾は塩剝と鶏冠石を砕いて混ぜればいい、中に砂でも小石でも入れて、爆発力を強くするには、それを針金で巻けばいい」と言つた。そこへ宮下太吉が入つてきた。そうして奥宮からその話を聞いて、拵えて見ましようということになった。そこで塩剝は新村が大石さんの所から黙つて持ってきた。鶏冠石は、これも出所がちゃんと判つてます。宮下が山梨県で買ったんです。これで造つたんだが、鶏冠石を砕くのに薬研が要る。これも苦心して買つてきた。新田融が何処へ置こうかと困つてると、新村善兵衛が預つてやるというので、新村の所へ持つて行つた。新田と新村善兵衛の

二人はただこれだけのことで六年やられたんです。こうして苦心して一つ造つた。それを試そう、試そうと思つていながら、なかなか機会がない。今日こそというので、宮下太吉が山の中へ持つていつてポーンとやつた。ひどい音がしたそう。

ところが、世の中のこととは実に小説よりも奇なる証拠に、ちょうどその日、宮下太吉は危険人物だ、取締れという命令を受けて刑事が宮下の所へ行つた。その途中で途方もない音がした。何だろ、何かやつたな、というので嚴重に家宅搜索をやる、だんだん判つた。宮下が爆弾を一つ拵えたという。ところが太吉はその前に、爆弾がうまく爆発したので、幸徳の所へわざと葉書で「生れた赤ん坊の泣声は大きかった」と言つてやつた。その葉書が家宅搜索の際幸徳の所で発見され押収されてしまった。だからまあ、幸徳は爆弾が成功したということは知つていたということになる。

官憲の方では、幸徳の家で爆弾の話をして、実際に一つ拵えた。五十人募集しようといった、これを調べようというので九州方面まで調べた。そこで、一夜に天下を取る法という話を聞いた人、それから爆弾製法のことを聞いた人、これがみんなやられた。石川さんはその時監獄にをったから助かつた。私も当然やられるべきところを、名前を消されて大石さんが助けてくれた。それに僕の代りに呼ばれた成石の兄貴、酔つ払つて「やるべし、やるべし、大いにやるべし」と言つた。この男の商売は何かという因果なことに田舎の花火屋だつた。この男が新宮町へ煙硝を仕入れに来てその新年宴会へ呼ばれたわけだ。そこで官憲は、ははあ、爆弾を拵えるために兄貴の花火屋を味方に入れたな、ということになった。

もう一つ、九州から熊本評論社の連中が四人ほど（松尾、新美其他）赤旗事件の公判を聞きに来た。その帰りに幸徳さんの所へ御機嫌伺いに行つて「何か面白い話はありませんか」といつたら、



「こないだ大石が来てこういふ話をした」と話した。それを九州へ帰って話したんだ。その連中がみんな死刑になった。

## 十七 幸徳秋水

幸徳秋水は本名を伝次郎といい、秋水という号は恩師中江兆民の若い時のペンネームを譲りうけたのであろうと思います。明治四年、彼は土佐、中村町の郷土の家に生まれました。父の篤明には五人の子供があり、秋水はその末子でありました。末子ではあったが、長兄の亀治が伯父の養嗣子になり、二人の姉がそれぞれ他家に嫁いたので、伝次郎が父篤明の相続人になったのです。幸徳という姓は珍らしいが、もとは幸徳井と書き「かであ」と呼んだものだといわれます。その先祖は安倍晴明の末裔で京都の公家の一人であったが、何かの事件で京都から遠い土佐の中村町に流されたものらしいのです。そして姓名の幸徳井から「井」の字を取り除いて、ただ幸徳と称するようになったのです。ただし墓には幸徳井と書いたのが、まだ存在するというから、その変名は余り古いことではないであります。この幸徳井は安倍晴明の流れを汲む陰陽師であったと言われ、中村町に於ける幸徳家の代々の家業が薬種商であったのと思ひ合せて、その間に自らなる連繫のあることが発見されると思います。